和松川藩志

六

ル 4
3221
6

門ルイ
3221
巻 6

昭和九年
九月二九日
購求

山陵

利根川圖志卷六

下總 布川 赤松宗旦 義知 著

香取浦

香取志云古の海西の方ハ利根川ふ續き東ハ銚子ふ至る事十里餘北の方ハ潮來ふ至りて一里餘乾ハ霞ヶ浦ふ接て是まで十里餘艮鹿嶋息栖ふいたる支三里かくのごとき大河たるを以て古ゝより渡り難き浦とせ故ふ香取の浦同ト く海又沖ふど〳〵詠る古歌多くあり先海と詠るハ万葉集ふ人丸 大舩の香取の海ふ愠おろ〳〵如何ふる人ろ物思ハざらむ又浦と詠るハ續千載集ふ定家 夏衣香取の浦の假寐ふ浪のよるく通ふ秋風まく沖と詠るハ家集家隆 今日ようハ幣帛取祭る舩人の香取の沖ふ風向ふ形り此外諸書ふ多くあり

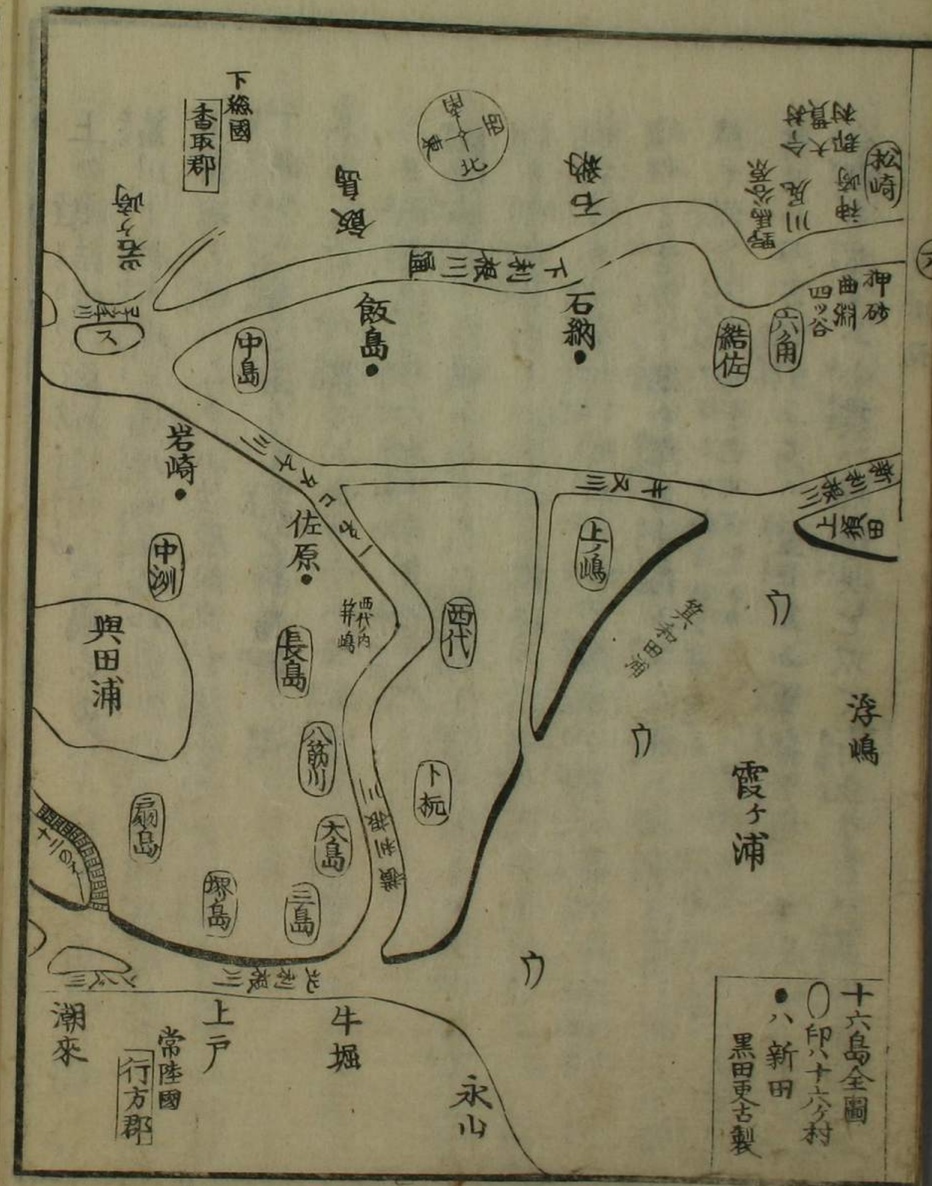
十六嶋 本名新嶋とゝふ香取浦洋中ふあり香取志云斯て數百

の星霜を經るまゝ洋中ゟ自ら洲出來年を積て稍大き也
爰ゟ天正十八年水陸田を開き始め上島まゝ成就を石田主馬
亮といゝる者吉田左太郎ゟ就て　東照神君ゟ言上を神君
ゟこゝめされ吾治國の始め新嶋を開くゟと願ゟ所あり平相
國清盛自已の功を以て兵庫の築島を立らる今家康ゟ德ゟ曰
て新島おのづゝら出來を喜悅の至りと仰らを八筋川西代ト
杭班田成就ゝ同十九年大久保重兵衛ゟ仰せて夫役を許さを
らを蠲符を賜ゝる慶長十年長嶋出來同十九年六角をゝらき
元和三年石納飯嶋寛永元年大嶋を開き同三年嘉藤洲同五年
堺嶋同七年結佐同八年中洲同十五年礒山扇島ゟれを然きバ
天正十八年ゟ寛永十五年ゟ至るまで三代五十三年ゟ至て
十六嶋班田の功成就を出きを新嶋といゝふ此島殘らび　國初
の御先蹤ゟ隨ひ後御両代も同ゝく蠲符を賜ゝる云云

上の嶋結佐六角松崎西代中嶋ゟの六ケ村を上新嶋と唱ゝハ
筋川ト杭大嶋三嶋堺嶋扇嶋加藤洲礒山中洲長嶋此十ケ村を
下新嶋と唱ゝとをゟ佐原組津宮篠原大倉岩崎の新田四千石余を
一耕地入會とゝありて是を新島料と唱ゝゟと云

。あゝん堂　八筋川ゟあり十一面觀世音を安置を例年七月十
八日相撲あり御堂惣赤ぬうり世人あゝん堂といゝふ

。藥師如來　大嶋ゟありこハ當島を開草ゝさる黒田玄蕃亮則
利ゲ守本尊也といひ傳ゟ諺ゟ云新嶋起立の頃黒田則利と常
州行方郡大壹半堀より十五六丁北堀内村の城主小貫大藏高九万石餘行方
家老と云と常陸下総の堺目爭論ゟ及び互ゟ船中ゟてアカトリを
以て泥を打合之アカトリ和名抄ゝ扉和名由土利洩ス舟中ノ水ヲ　ゝ
其日ハ双方相引ゟあり翌日互ゟ軍船を催ゝ牛堀前ゟおいて
合戰を然るゟ小貫ハ飛道具を以て打立ゝをバ黒田勢大いゟ


十六島全圖
○印八十六ヶ村
●八新田
黒田更古製
霞ヶ浦
浮嶋
上嶋
下板
西代
西代内并嶋
長島
八筋川
大島
三島
塚島
扇島
中洲
與田浦
佐原
岩崎
中島
飯島
石納
佐ヶ崎
下総國
香取郡
結佐
六角
砂神曲
四ツ浦
野島ヶ原
川尾
神崎
大今村
和賀村
松崎
牛堀
上戸
常陸國
行方郡
潮來
永山
北
東
西
南

北川
阿玉川
小見川
下市場
下小堀
鼠田
三ヶ谷
一ヶ谷
大倉
香取郡
津ヶ宮
篠原
濱川
宮津
大倉
四ツ八
守り洲
公官入
浦田和市
錢山
新左エ門川
三十石
寺脇川
浪逆浦
内浪逆
洲
延方
特添
大洲
辻村
延方
鹿嶋の海
高濱
息栖
賀村
鹿島郡
下幡木
鳥井

敗北してふ急難のがれかたく覚りをれば黒田ハろの藥師如
来を一信ふ祈念せしふ不思儀ある哉暴風頻ふ吹起り荒波敵
船を顛倒せ其際ふ黒田勢ハ霞ヶ浦めうざの鼻まで逃のび難
ふ〳〵引取々るとうや（是を世ふどろ於合戦といふ後ハ公の御沙汰ふ任ると也）

。加藤洲十二の橋ハ川の両邊ふ民家ありて家おとの通行橋也
（両岸ふ橋杭有て中ふ板を架せ）もとより十二あるが時と〳〵て十三ふ成ぬ
せバ又一橋闕るとと極めて出來るとあり

。子育觀世音加藤洲長泉院境内ふあり古の寺より御夢相ふて
小兒五疳驚風の藥を出せ世ふかとうず藥といふ

牛堀　霞ヶ浦入口ふあり霞ヶ浦ハ至て渡り難き海ふをれば此所ふ
滞船して風をまつ故ふ出入の船多く此河岸ふ集りす〳〵鹿嶋
ふ至るふ利根川より横利根ふ入り北利根川を經て浪逆の海
にいでる鹿島道記ふ（仙臺君）霞の浦志田の浮嶋ふどい〳〵るとこ

ろ船のうちより見ヒさるまゝ右のうゝそるうふ筑波山こ
のも彼面の峯も見えさり漕行船の追手ふれば見るがうちふ
むうふ山々も跡ふふりてゝふやふるき詩ふ汲水凝山動揚帆
覽岸行といへるもされゞら目前の景氣ふかひやらるゝ海
濱ふ海人の家居ありて前の杭ふ網をうけわゝ磯邊ふ小舟引
そて物さむゝる住居のさはゞふよく繪ふも似ゝりゝりと船
ゞさふつらはえつきて見るゝこれも跡ふ成ぬ昼つゝゝ風も
ふーむうひてうちくもり夕立一とわり去てふえうに船のう
ちさうゞゝ岸ふ船をよせて風のうかるをまちゝるふ雨ふど
ろふ降きさうゝれバ笘引かゝふ心もいとむづうゝ半時
斗して雨風やゝ名殘の雲も晴ゝとさうて空も見るがうちふき
よらうふ日影の見えゝるふ岸の芦の葉ふかゝをる露をやら
くと風の吹みゞれさま涼ゝさいやまさりぬ爰ふ船うけたる

はゝふてとう子やうけものとうむうき人々ふもそゝ発をづ
うらもたゝめて時うつり待れバやうゝ日もかさふれぬさ
らバとて漕出し行ふ潮来のむうむふあさりて香取明神入海
をへざて〳〵神々〳〵おぎりあむさる木の間より玉垣ゐの見
え侍るいとさふとくをがまれさせ給ふ海よりうちいる塩と
水とのみふとなをバ浪たうく舟おづうふらバされども所の
もれども引舟多く出して綱をあて先ざち引々をバ日高くお
もふ岸ふ舟着さり潮来うゐて此礒ふハつくべうりゝうり
と舟のうちれ者共もいひあへりゝをども今朝よりれ追手の
風ふさそハれ漕とも覽えぬそしり行ゝるゐ忘申剣そくるゐ
どうやとおゐゐ舟よりあゞりておもふうさふ入侍りゝれバ
あるドの出あひてもてれしいふ斗ふし此宿のあるドハヒれ
ふちふをふうゐもれふれバヒきて心ふうゝりあり参議源宗

尭卿水戸御使たまりくぐものふど送り給ふ此君も二日三日
のうち常陸れ國ふ下りすふべき沙汰あり爰もかの領しのふ
呼ふれバ何くをと驛路の人馬おゐく出して旅の舎りれこゆ
まで御ら〳〵ふふけ武藏野より先ざちいひをらせ給ふとぞ
みうちれ人々ヒきてそれさざせり
同安永道の記ふ香取の浦ふ舟よするも浪ハ志づうふれど風
むうひて舟おそく日も暮ふんと舟子ども云ハ遠
く見ゆる森の木立そのうさとときこゆれを遥ふをづをぬうづ
さけ〳〵浦ふをの立もをら紛れ
音ふのを聞て扨ヒさる夏衣かどりの浦ふよゐる夕ふを
銚子といふ湊より入くふ舟ども追手ふれバ此浦ふ着うると
て帆柱のをたて〳〵けふゞる舟あまさ見ゆ是ふん香取の浦と
いふ

帆柱ぞみをはくしれる大船のかとりの浦の見るめから衍
どかくてゆくり〳〵川岸の田面を越て霞の浦見ゆるもとるきー
ちら浪の高く打よせる浦のふがめ折うら夕陽日かゞやきあ
ひて船中第一れ佳景ふり

入日影色とる雲ふ立そゆる霞れうらの水れちら浪

まさ信田の浮嶋みどりもゞしく浦のあれさふ木ざち一もぢ
引ひさーきるやうふ見ゆるいふも元ふらゞ

浦の名れうすをも夏ふそるゝ〳〵や見るめ世ぞらぬ信田れ
浮嶋筑波山遠うら衍ども雲立こめて見えゞ日くれぬれば河
岸ふ蛍のみゞも飛あまさ見ゆるもちぐーれもれうら夜いさ
く更ふむ事ふ心おちぬ衍バ歌よまゞいそぎり〳〵潮來の河岸
ふ船をつゝぬ云歌あぬさあもどー首づーを云あぎて其余ハ畧も

潮來　鹿嶋志云鹿嶋うりハ西二里行方郡ふて滿肆有ていと繁
昌ふる地ふり潮來の字もとれ板來と書さるを西山の君鹿嶋
ふ潮宮ありて常陸の方言ふ潮をいさといへる興あることく
おゞーてかく書改られさりとう和名抄ふ行方郡板來風土記
ふ從是往南十里板來村近臨海濱安置驛家此謂板來之驛云ま
さ淨見原天皇の御世建借間命をして凶賊どもを擊亡さるゝ
所ふ種屬一時焚滅此時痛殺所言今謂伊多久之郷云云
潮來圖志云常陸ふる潮來の里ハ東都五町街ふふらひー廓ふ
り朝夕の出船入ふ衍落込客のぜんせいい花のにーた雪のも
ふ百十六嶋々ハいふもさらふり香取かーふ息栖てうーみ浦
々まぢも一まうふうろみ冨士筑波の両峯ハ西南ふつらふり
数十里てうまうの影境ふり近き頃まぢ銚子口より親船おき
もゞ〳〵入津せー處也諸矣の藏屋敷建つゞきーゞ淵瀬うこ
うて船もいらゞ唯仙臺河岸のゝ存ぞまさ西の入口ふ潮浪里

いたこ潮来の圖
ウラノ川

利根川
加藤洲十二橋

や呼小坂ありうーゐのさーゝ引ける故ふ左ハ名つけーかゝん爰
ゝや遊女町まて十餘町其間を淺間下ゝゝいや高き並木ゝり
いゑこのたらゝ松ゝて沖乘船の目あての森ゝゝ春ハ梅藤の
名木四季ゝ花ゝ咲いとゝろゝ此處ゝゝ霞ゝらゝ信田の浮嶋
手ふゆゝる如ー

海雲山長勝禪寺　二町目ゝり入る馬場の両ゝハ松の並木山門
ふ十六羅漢を安置ゝ佛殿ハ南向十間四面　右大將殿の建立
ゝり堂のゝゝさゝらふ卧龍松前ふ文治梅あり鐘名ふ
常陸國海雲山長勝禪寺鐘名有序
寺始於文治元年右大將殿時所立也迨今元德庚午百二十余
載乃爲鎌倉殿御願所大檀度道曉禪門以古鐘未宏貫眷等
共施貲新而大之住持妙節長老請於圓覺清拙叟爲之銘曰
維古蘭若　長勝厥名　寸進微撞　今器未宏　爰命鳥氏
鎔範速成　鏗々訇々　殷雷吼鯨　音聞佛事　聞聲啓育
大哉圓通　十虛廓清　霜天月曉　落景初更　眞機普發
衆夢齊驚　深禪偃仰　苦趣休停　客船夜泊　常陸蘇城
上延磬筐　下息戈兵　檀門茂盛　梵刹堅貞　海雲日横
青山崢嶸　人天號令　相道通亨　元德庚午十月一日書
大工甲斐權守　助光
住持傳法沙門　妙節
大施主下總五郎禪門道曉
大檀那相模禪定門　崇鑑
斯志るーゐり此鐘ゝざりふ撞事をゆるさゝ又時の鐘ハ本坊
れ入口ふあり
小里姫の塚　同大衆院淡島明神の地内ふあり小里姫ハ島崎左
衛門尉殿れ姫君ゝり今ふ小里ゝふ古跡の地名ゝり

潮來竹枝詞　　詩佛老人

思似月明復水清隨郎行處逐郎行誠從十二橋頭望何水何橋
無月明

泊碧櫚舍　　鵬齋老人

家々面水須秋色明月湧時流更輝漁唱一聲何處子潮來風起
竹枝辭

さゝ波のりてちゝみやあゝむ窠さむさえ山ゐ千鳥のゐゝ
ゐゝ聲　　魚貫

鶺鴒や潮來をしゝて岩つゝし　　蓼太

南郭文集ゐ潮來詞二十首序五山堂詩話其外詩歌發句とも
諸書ゐ散見する處擧て數へがゝ暑之

松屋外集ノ二神社を古曾といふ條ゐ伊太祈曾ハ和名抄ゐ紀伊國名草郡伊太杵曾神戸あり且來郷日前神戸須佐神戸あどゐ並びあり旦來をイタコと訓むハアシタコのアシ社約イなを
いあり常陸鹿島ゐ潮宮といふる小祠あり又行方郡板來郷を

今ハ潮來と書々りこハ朝來の誤ゐらむと門人北條時鄰ゲ鹿島志ゐい（り續日本記四の巻ゐ紀伊國名草郡且來郷と有り

名物　花あやめ　川ゑび　鯉　むゝ鮒
扇島　いらんゐ聲うけらるゝ田植このゐ　　五達

潮來曲の唄

柳よやゐぎよ直ゐるゑゐぎいやゐ風ゐゐゐびゝんせ
さえハ三夜の三日月さはよ霄ゐちらりと見さぞゝう
ヒしゝが心ゲ竹ゐもゐゝゝバヒつて見せさやさのむねを
さゑよかゝゐゐ神ゐるゐらびのてせたまゝや今一度
いたこ出ゝゐの十二のえゝを行つもどりつ志あん橋
戀ゐこゞれてゐゝせえよりもゐゐゐ螢ゲ身をこゲん
いゝこ出島のまこもの中ゐのやえ咲とわつゐ志ゝゝぞ
戀のちヒぶえ笛ゐひゝゐゐ祇ぞみとるよゐ猫ほゝや
數あれども余ハもゝゝぬ

潮來の遊女何某ある時の吟

おもふ事積でいくづす炭火のわ　俳家奇人談

露しもやとろく霜らもぬ舟の中　霞水

潮來詞二十首　并序　南郭文集三編一　三才

甲子春遊鹿島舟下刀禰行聽數乃聲調楚辺頗有情致問之則云潮來所歌潮來常南地名也既自鹿島歸舟歷其地就見臨江數百家多倡妓俗雜日夜相聚游戲蓋東控海西通都率多水漕之利魚盬之饒商旅所湊亦江東一都會也其謠大類異歌當讀樂府遺篇是聲歌曲及西曲諸樂想見六朝謠俗之態其聲雖不知以今視之古風詞情蓋可知也又感劉禹錫聽竹枝之音乃雜擬江南諸樂符此作此詞二十首因記舟行興寄聊自聲

不見東流水歸舟西曲流潮來風且逆有時不自由　可憐洲裏鳥兩々浮江水日見不識名

指顧問客子　門前猗獨樹鬱々掩江涯爲是苦心多春來不著花

雲氣南邨晚　日紅出水

一雨洗時來　不須遠

蠶毛毛如雪　穫生長江

萬里風

曉雨乃稍川　水雲老人球

園邊川　潮來の前れ川をいふ北利根川の分流ふて末ハ延方よ
り浪逆の浦ふ落つ此川の名ハむかしいさこの大和屋太兵衛
抱の遊女花の朝夕びん水を流しくる故そのべ川と云とあん
ふまつ川　北利根川の末ふあり是より浪逆浦へいづ
髭ゐどの芦戦ぎくり鯰川　貞翁

浪逆海　鹿嶋志云大船津の前より行方のめぐりをかけて云り
萬葉集ふ　常陸ゐるなさらゝ北海の王藻こそひけざさえそれ
あどう絶せん仙覚抄ふ常陸の鹿嶋の崎と下總の海上とのあ
いひより遠く入こる海あり末ハ二流あり風土記ふハ出ものを
流海とかけり今の人ハ内の海とあん申そその海一流ら北の
こゝ鹿嶋郡南のこゝ行方郡との中ふ入もり一流ハ北のこゝ
行方郡と下總國の堺をつゝく信田郡茨城郡までいれり然るふ
う北内の海塩れこつる時ふハ波ことふさらのゐる出られば

浪のさうのぼる義ふりて浪逆海といふべきあり云々風
土記ふ香嶋郡ハ西流海まこと行方郡東南并流海云云
安永鹿嶋道の記ふ今日もまこと船路ゐくまづ漕出もバ潮來昨日
ふハ似ぎ廣き堀江の芦間ゐくゐどもをく一真ありりい
つしゝ岸うこと遥ふ漕出れば入海とやらんいへもど蒼海うだ
うちゝれぞうあこと出れとの山も磯ゐも石ど遠々もどゝふハ
浪風あぎゐこゝていと静なれば取楫ゐるく心ゐさきし十あ
まりれ嶋ぐゐふかきるとも及ばこく見ゐ息栖ハえるうふ沖
のうさこ出さるいふもさらあり
立ばぐく松の洲さゐふそれとまついえでもちるく見ゐる
神垣古の御社ふも昨日詣むとの武藏の國府ふていそれあら
まーありーゞ此頃の風ふて船路追手ふらゞ打やこぬ今日ら
よくたきて船路も静なもバ船よせむと船子どもいへもど兼

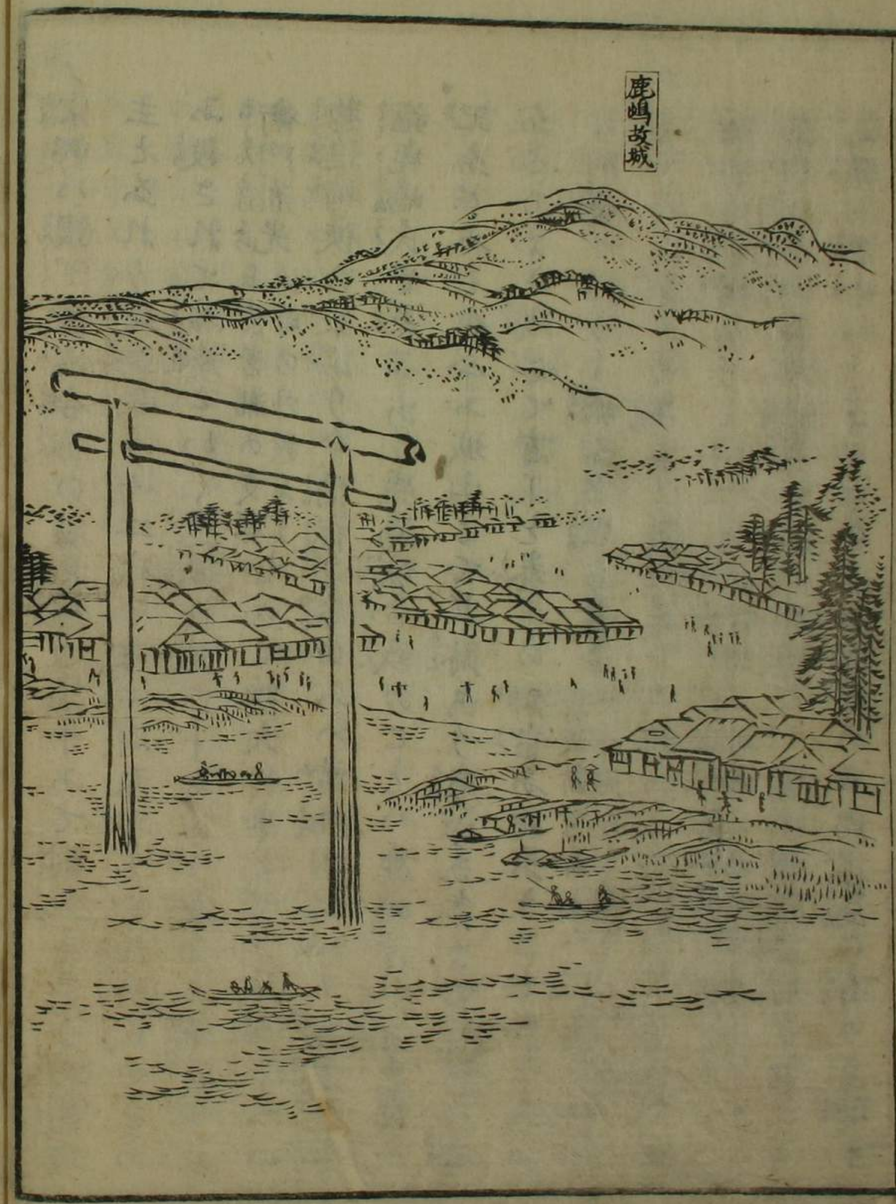
てそれまうけあら祓バにたうれとりまうふひい出ゞさく行
過ぬゝどあく大舩津ふ差ぬ此きしかさ十八丁ぞうり放さて
海中ふ鳥居さてうといふ今建暦の時ありとて見えゞ云云

大舩津　鹿嶋の神社一の鳥居海中ふたてり鹿嶋日記ふ舟津と
いふ是大安寺社私貳帳ふ津國西成郡舩津とみえ平家物語有
王嶋くゞりれ段ふ彼嶋へとさる舩津ともにりて舩たく呼ふ
いふ名ふりそう云さもも神の津ふれバむうしハ津の宮とい
ひしよ風土記ふ見也是そう神宮へ十八丁

まさ大舩戸と見ゝ東國戦記鹿島合戦の條ふ文畧江戸崎
の城主土岐伊豫守五千余騎を引卒し大舩二百艘ふ打乗り順
風ふ帆をあげかしゝをさして押寄るとの事ゝしまへ聞へけ
きばかしゝの棟梁平自官友治大ふあどろき合戦の手分を定
めんとまづ塚原の城ふハ林左京大夫を大将として五百余騎神領ふハ大宮司
の城ふハ林左京大夫を大将として五百余騎鹿嶋の宮の前ふ扣々る土岐
を大将として五百余騎鹿嶋の宮の前ふ扣々る土岐
伊豫守大舩戸ふ舩を漕寄て敵の様子を聞せける云云

鹿嶋の故城　鹿島志ふ鹿島三郎政幹の子六郎宗幹始て築處也

宗幹ハ讃州屋嶋合戦の時義經の先手ふて討死さ其子時幹城
主とふれり時幹より十二代の孫治時天正年中佐竹氏のさめ
ふ殺されて城廃さかゝ鹿嶋氏滅亡しふより國分大膳次男左
衛門胤光千葉常胤の支孫を立て惣大行事とせり是古しへの
惣追補使の家ふり今猶存さ姿曲ふい常陸國誌源平盛衰記東
鑑鹿嶋氏世系等あり鹿嶋城合戦のことい鹿嶋治乱記東國戦
記ふどふこも今ふ城山とて其跡あり慶安五年までハから堀
ふどあまさ残さて有しを紫平の御世ふ用ふきことそて大宮
司則廣うけうゝ堀ふど埋らまき　新坂新町ふと云ハ此時開けしふり　又大舩津
より北ふ當りて峯あり里人是を大様べさといひて常陸大掾
國香の城跡ふりといへり　北條九代記北條相模守義ふ從て奥山討手ふ行条ふ潮田鹿嶋小栗並方
義經記評判義經都落の条ふ片岡こそ常陸國鹿島行方といふ
荒磯ふそせいしるものふを信太の三郎浮島の有々る時も



鹿嶋神宮
一の鳥居
大船津
の圖

常ふやきて遊びくるふ源平の乱出來候ハヾ葦の葉を舟ふー
ゑりとも異朝へも渡りなむとさんトくる

鹿嶋大神宮　常陸國鹿嶋郡鹿嶋郷正殿武甕槌神相殿神右ハ經津主命左々天兒屋根命を祭り神代の昔よりハの所ふ鎮座ー大神ふていともくふる記事あり風土記ふ淡海大津朝天智天皇り初遣使人造神之宮自爾已來修理不絶云とものせり猶委ーき支々鹿嶋志ふ詳ふきい畧に

萬葉集ふ

霞降鹿嶋比神を祈ほ〳〵皇軍ふ我ハきふーを

○摂社末社そべて八十末社あり畧之

○祭禮ハ年中の例祭大神事百三十三度小神事七百餘度その内常陸帶の祭正月十四日　祭頭二月十五日昼夜　御田植祭五月五日　御軍祭七月十日　御舩祭七月十一日夜　新嘗祭八月初丑の日　相撲九月九日の夜

○名所　要石地上ふ出さる所二尺許石頭ふ夫木集ふ光俊たづね〻ふをつる哉千早振る山のおくれ石のみまゝを

御笠山神宮のめぐりの山をいふ松杉の御手洗川二丁ばかり山の奥ふ有古木れ中ふ清いとおふし

高間の原東一里斗り海辺ふあり末無川同所碁石濱同所鹿島浦東大洋海角折濱三里斗甕山北ふあり神の池三里斗南ふあり浪逆海大舟津の前

○御物忌身潔齋して神ふ仕へ奉るれ祢ふあり物忌ハ神官の内より其職とさだむと云

○大宮司　神宮寺の支鹿嶋志ふ詳ふあり

○神寶　古文書等畧そ

○七不思儀　要石　御手洗の水　末無川　御藤　海の音　根あゞ松　松れ箸

○七井戸　深井　成井　清水井　保太井　寸府井　華柄井　波左間井

○名物　洲濱の菓子　俚俗デンチユウといふ

弥勒謠　土俗のあらひふ物の祝ふどあるをり又ハ祈事をる日ふどをべて時節ふをあつゝ老婆等おゐく集ア弥勒謠とて各声をあげて歌うさひ大封をうちて踊をり手を振つゝ踊る貌いと可咲く中昔の風とをえさり其謠ふいえく「よのあろハまんどまりだいをろくのふ舩ゞつゞいさゞともへふをいせとかもゞあうハかしまのおやしろありゞさやいきをおもりハこゞ祢社やゞんうてかゞやくうしろふハひよきろみさちまゝハめゞ祝をゞめこゞさふゝかとりハ志ゝふおやしろおとにきくもたふとやひとさびハまねうまうしてか祢のさかふまかうよゝねさごそおよひござゝぬよねのさゞふまうゝよなふことゝもかゞへのへひさちかしまのゝみゞ」又雲萍雜志ふも鹿嶋踊の謠見ゆ此外くさゞくの謠あり

經石　御笠山のうちよ埋さる所ありて五六間許のあひさ小石ふ經文を書さるゞまゝ親鸞上人ゝ筆也といひ傳されど總常日記臣濱ふ近き頃ゝゞ友狩谷望之ゞさゝふまうでしをり出さる銅牌一枚を見きゝ秀尊といへる法師の書て埋めたるゝて親鸞上人のふゝあゝぬさと志るゝ

表

鹿嶋太神宮寺
奉納妙法蓮華經一字一石書寫　一百三十七部
嘉吉三年癸亥二月二十日　大願主秀尊白敬

長九寸一分　幅上三寸三分　下一寸六分強　厚一分弱

裏

嘉吉後花園天皇年号　推文化十二年三百七十三年

嗣筆　慈父祐尊　慈母有阿弥
醫山　良貞　道祐
道永　徳賢　妙意
次郎三郎

今ゝやしろふをさ免あり

鹿島
神宮の圖

享保道の記仙壹吉村君　それより輿ふのりてゆく浪打際まで大船津大
宮司同神司東主膳出あひておしへたまふ立て主膳ハあふひ
も所の古跡ふどかうりきうに威徳院観照院寶照院地福院ふ
どいふ真言宗の寺あり大船津の湊家數千斗ありといふ此里
をとおりて山のかさふ石ふてうけさる小橋のりこれ鹿嶋明
神の御神領ゝ地あり古のところを藤原郷といふ大織冠鎌足
公ゝ御誕生の地なるもへうくいへり則社もありといふいや
いぶうー大織冠ハ大和國高市郡の人と元亨釋書ふハ見えさ
り此遠國ふて生れ給ひしと云こと拙きうに詞林採葉抄ふ鹿
嶋明神ふ参詣しまふといふ事見へさうそれさへいちぢるし
からぬさやうの事ふうゝひ出して後人のたさへなるふや鎌
足公ゝもちたまへふ鎌も此社ふあるよしをかさる猶信ドが
たし近衛殿御家ふたさうりふるようきそ聞ゝもまさ鎌倉ふ

かの鎌を埋をまふといふ説もありふるさこれさ數あるべき
もゝとも おぼへ ゝ ゝ ゝ ゝ を う本説ふ〳〵む瑞甕山根本禪寺とい
ふ寺あり門の額ハ東海禪窟とあり筆ハ若らざれどもふるく
もへうりて見も本尊ハ藥師如來推古天皇の勅筆ふて佛殿ふ
祈禱とあそばされふる額ありふのまくぐりゝ御甕とて齋の家
ふ今ふ傳甕ありといふ藤原光俊の鹿島を見れば玉ざれゝぶ
ろめ斗ぞまさのこりきるとよをふうゝハ此ろめの事とぞ云云
まさ安永道の記徹山君ふむうー此道を祖父君のくぐらせのふ
道の記ふくさーゝれば かく ぞ彼主膳か宿ふ至りて浴を清め
衣服ふどとりゆゝくのへてまうでぬまづ跡の宮ふまいる夫よ
りて御齋ふまいる女四五人ふ〳〵びぬさる中ふおとなひ者
る女立出て御酒をゝめまさ御齋のうをくらるゝ和歌二くさ
もてく主膳かさいらふ居て通ーせよと聞ゆれども神盧のお

それもあるべとみふいらへせん事のそでうりふうく帰國
れ後ふこそ申べきまゝ為てまうてぬ御齋の歌二くさ有る

わゐみ守護のところみちれくの大守鹿嶋の社へ
立より給ふかゝーこさふ神盧れ程をおゝえうら
い祝の余りふ言の葉をはゝーりゐてまつる

鹿嶋祭主御齋光子

うれゝーやと神も物もいむ今日いまさまれふる人のあふく
まごとを

又寄國祝をまみ侍る

かゝーこゝれ猶ゆくそ和もゐびくらゝーおさまる國れ御代の
民くさ

とゐりそれば日を經て返ゝーとて申遣ゝーる

鹿嶋の御社ふ詣れる日御齋光子れもとゝうう

とゝーやと神もおもいん今日ハまゝまれふる人の
あふくまごとをとかいはけて送らもられえ
外ふまゝ何うおもいんまきふきていのるまことを神ゝう
けふべ

寄國祝といふ事をよゝて送らもりる返ゝーとて

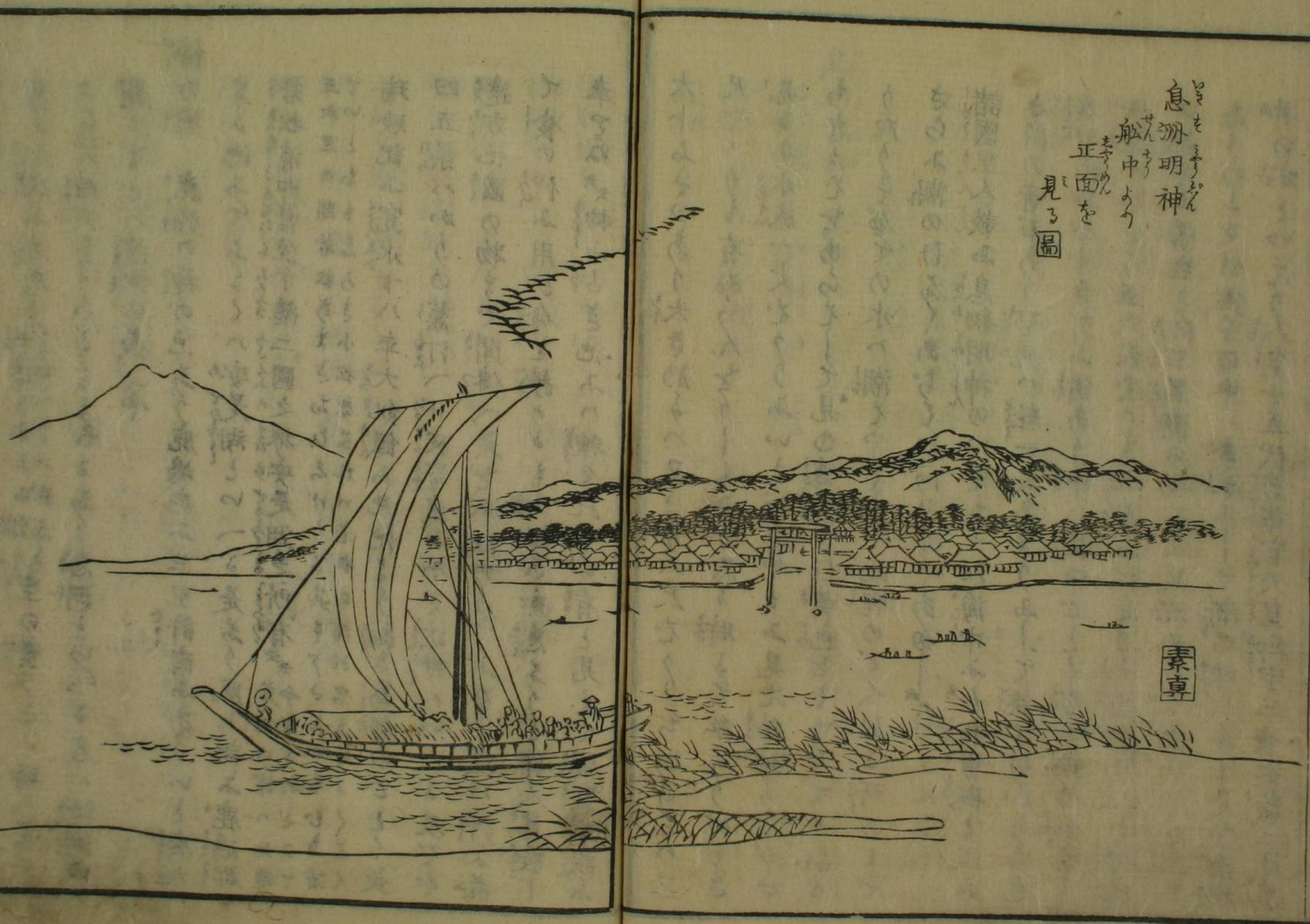
代々うけて治ゐ國れ民くさもことでの露ふ猶ゐびくらゝー
かくて十町あまりもにゝむ木立はゝーく所を行て鹿嶋の御本
社ふ參詣をきゝーふまさる森の志ぎりたるゞ中ふてきて杉
れ木高さをゝ何とゐゝ神さびてゝ歌とうとさいをむうさふ
ゝー樓門ふハ大宮司何ゞーをはゝーめ神主あまゝ出迎てあふい
も拜殿歌仙の間ふどいふきらめゝてゝうぎふさうともとお
ゞゆ石の間より内陳ふ入事おゞみ奉り公てゝくゝれ祓きお
とまれべみてくらゝてゝうせみきを進るふどいとゞさゝ侍

ちづまりて思ふくはふ〜是より七八丁歩より行て奥の宮ふ
参りまうでは〜新ふて又旅粧ひして御手洗要石ふど行て見
る又もとの道立かへりて御本社残るうさふくおがみぬ數多
ひ霊寶をも拜して後宮めぐりをれバふるひ鎧あり御本社の
内ふ神木の杉まことふそぎゐ〜くいくとせう經さるもの枝
木高くつと〜ふうの主膳こまやうふかさる二の鳥居を出
てあ〜石よせて猿田といふ驛のうさふ行日もたけて午のさ
ごりあれバ高天原三笠山ふどいふハ見ぞして汲上ふ昼餉し
て夜いさう更て夏海ふ差ぬ云云

息洲神社　息洲村の海邊ふあり住吉三神底筒男中筒男表筒男
命を祭りて鹿嶋日記ふ處のさ伝駿河のくふれ三輪の社頭ふ
似さうといえり總常日記ふ汀三十間ばうりそ形もて海中ふ
鳥居さてり鳥居のきは二三間はれもて神代よりれ瓶といふ

大小ふさつあり大きなるハ三尺六尺ばうりちひさきハ三
尺ばうりも有ぬらんをりしも潮干なる時ふて船よりれぞき
見るふ水底一丈ばうりふいとなのざやうふ見え砂地ふうさ
ちなうばをあらそ〜て見も薄黒きに黄色をそ〜てりひら
りたりをばその水ハ潮をふくくして此瓶のうくれる所のそ
さらふ潮のけふくあぢそひのこしくあ云云

諸國里人談ふ息栖明神のいそちうに海中ふ女瓶男瓶とてふ
さ川の奇石あり男瓶ハ経一丈あまりふして銚子のかさち也
其口とおゞーき所ふ溝あり中ハ控のごとく窪て鍋の形ふり
女瓶ハ口〜う五六尺ばうり土器ふ似うり土俗曰これハ神代
の銚子土器也と此石満潮ふハ二三尺沈めり干潟ふハ水上ふ
あ〜ハるその銚子の中ハ素水ふして潮の味ひふ〜是を忍塩
井の水といえり人皇十五代若櫻宮天皇御宇三癸未歳二月鎮


息洲明神
船中より
正面を
見る圖
春章

座の額あり云さて此瓶ハ水中ふたてる鳥居の左右ふありて
常ふ水底ふ沈りとい干浮ふ水上ふ出る空の曇りさる時ハ見ヒ
うらぶ晴天をりハふくくるあり息洲といへる名ハ沖洲の
義うまくくハ浮洲の義ふや

神の池　鹿嶋の神の池あり鹿嶋志ふ三里許南ふありいと廣大
ふる池ふてふるくハ安是湖といへる是あり風土記ふ鹿嶋郡
若松浦即常陸下總二國之堺安是湖之所有云云今深芝村と云て
五六里の間若松あまさおひふげり各其もぐくふおもむき有
ていとおもろき小松原ふれば若松の浦れ名もしるくふん
瑞験記ふ寛永十八年大飢饉ふ此池ふり細き鳥縄のごとく長
四五尋ばかりの藻汀へ日夜寄來るをど近邊ハいふふ及ぞぞ
遠方他國の物まで聞傳へ是を取飯のうくふなし或ハ汁ふ煮
て食の代ふ用ひ命を續くるも大神の御惠ありと諸人尊敬一
奉アるぬ云云桜ふ古き池ふハ種々ものの有と見えて閑窻瑣談ふ

結毘録を引て元文二丁巳年播州姫路の一邑ふ池あり廣さ數
百歩あり〜〜ぐ或人の小兒其池ふ水浴て溺れ死しけるぐ水を
涸して田とせんとて一村の人々合力て水を酌乾せしに池の
底ふ白き綿あり土人ときを取て看るふ草綿ふ等しけるぐ糸
ふ繰せ織木綿ともるふ結好ふる着用とふもろ尤多く有し故
村中ふ用ひ餘りて他村へ賣出しけるぐ色白く上品ふもぐ他
郷の人も價を惜まぐ爭ひ求けるゆへ一村大ひふ利を得て徳
にきさうと也

苅野橋　神の池のわどりをさべて輕野といふ風土記ふ見萬葉集ふ
鹿嶋郡苅野橋別大伴郷とことかきしたる長歌ふ輕野より舟
出して下總海上をさして渡るふを讀てさきぐそれ遣りふ
あり〜橋ふりけん云今ハ古の橋ふ

童子女松原　宮本水雲云風土記ふ輕野今神の池あ地也以南童子女

松原昔〻神の男神の少女と云るがありて少女をゝび海上安是の少女といひ男をゝび那賀寒田の郎子ともいひしが何も美麗ふる生れつきふて互ふ思ひ逢て遂ふ契りを結びしが人目を愧て二樹の松ふ化せし事をのゝ是今の常陸原其地ふ向さをゝび鹿嶋の攝社とそ古く祭り来る手子后明神ハ神の少女を祭りしるべし古ハ常陸原の地下總海上郡ふ屬せし由も風土記ふ見ゆゝゝゝ此ひ女をも海上といひしふり安是の地名も風土記ふ出さり寒田ハ今三田といふ此邊皆いふしへ那阿郡の地ふて神亀以前ふ鹿嶋郡といふりし也

手子崎明神　東下の羽崎村ふあり鹿嶋志ふ旧記ふハ神遊社ともいへるよしゝえてさつハ大神の御女の神也といひ傳へうり按ふ上つ代香嶋郡童女松原ふ則羽崎の邊也神の郎子神の嬢子と云ありてかさゝふむつびさりそるが逐ふ松樹と化りて奈美松古津松といへる故事風土記ふ見ゆされバはの童女を祭る社ふハあらざるゝ嬢子を手子といふハ女子を愛しゝいへる名ふて万葉ふ菖蒲の真間ゝ手児まさ埴科の石井の手児まささゝりの手兒ふいゆきあひふどよめる手児もおるゝ〻さて手子崎ハ此ゝさり海の出崎ふれゝ手児の住そる由もてさハいへるふゝん云云

羽崎　東下の羽崎村ふり此邊をゝび羽崎舎利高野別所海老臺本郷アラクさの七筒村を合せて東下といふさて此ところハ鹿嶋の浦よりせゝぎきいと廣き砂山の木草もふく赤々と志さる砂地を經てさゝふ至るゝの光俊朝臣の家集ふ康元元年十一月鹿嶋の社ふまうでゝ彼嶋のさきふはうりて見ゆゝゝゝ我國ゝゝ東のそそふふん有くるゝの社より崎まで八七里とゝ申めると云りしハさの羽崎のことふてぞのりあるゝ

○是より川南

側高明神　香取郡大倉村山の頂ふかり古松繁りて神々しき森あり香取第一の摂社ありとぞ祭神ハ古しへより秘て云ざりしとぞ鹿嶋日記ふ側高明神といふあり年ごとふ鬚撫の祭といふことありそハ酒宴の席を設て賢酒をくみかはしもし口ばしあるの鬚ふでし者あるをもちひて三杯のまるるならいしふりといへり云云

粟飯原氏城跡　分郷村ふあり今城山といふ土手堀の跡まさ大ふる石櫃ふどあり小見川より西南三十丁ばかり有古の城も小見川とと名へしふや常總軍記ふ小見川の城ふハ粟飯原左衛門小見川越前守と見えさり

木内大明神　木内村ふあり諸國圭齋録下總國の部ふ七石木内大明神香取郡木内郷木内伯耆同五石熊野権現香取郡府馬村

宇井左門ふど見えさり

小見川　香取郡ふり内田矣の陣営ふり諸州採藥記云小見川内田何某領内ふ四季咲の櫻二ケ所ふ在り本ハ八重ふて一本ハ一重ふりと見也此さくら杉撫して今ハふしき年まさ撫らもしと名り天正十八庚寅年領地拝領下總國香取郡小見川八千石松平監物家次東源軍鑑三藤澤合戦の條ふ云小田天菴ノ旗下ナル小見河越前守輝賢ハ小櫻威ノ鎧ニ三牧甲ヲ着テ河原毛ノ馬ニ乗リ云云爰ニ梶原美濃守景國ガ家子梶原平左衛門トイフ者心ニ思フ様彼六人ノ者ハ近付テ討タムヿ叶フベカラズ然レドモ彼等ハ武勇ニ高慢シテ動モスレバ諸軍勢ヨリ先ヘ進ミ出ツル匹夫ノ勇者トハコノ人々ナリ何トゾ一人モ二人モ射殺サムト思ヒ唯一人櫓ノ木ノ蔭ヨリ子ラヒヨリ既ニ二十間ニハスギザリケリ平左衛門矢頃ハヨシト悦ビ思フ様ニ引詰兵ト放ツ其

矢アヤマタズ小美河越前守カノドブエニ葛巻攻テ寸破ト立ツ急所ナレバ越前守馬ヨリドウト落タリケリ云云此六人ト云ハ小見河ト由良判官則繩戸崎大膳亮長俊行方形部少輔貞久海上主馬五郎武經也まさ附録ふハ小田天菴氏治公旗下ノ城々小美河ノ城主小美河越中守とゝも

黒部川　同郡府馬志高稲荷入の村々より流を出づ是を黒部川といふ黒部の橋あり此橋より下を九十九曲川といふ屈曲凡二里許を経て小見川を経て利根川ふ入る

七本木　小見村の冨光山徳聖寺庭中ふある銀杏の木をいふ此木周り二丈ばかりふもとふ寄生六本ありそハ　樟　松　楓　南天　竹　ウシコロシ　是ふり銀杏と云もふ七本ばかり依て名ばくといふ

清水観音　清水村ふあり清水寺といふ十一面観音を安置せ世人筆を禁食して小兒の病を祈る参詣駿〻

夕顔観世音　五郷内村樹林寺ふばかり霊験あらさるふる観世音也門外ふ高き石坂あり此石坂を逆さふ向て這下ると云ふ小兒の病を除くといふ宿願ふよりて参詣もる人ハ皆さゝさふ這おりるふりたの寺もと寿林寺と書〻ふや常總軍記ふ

此所ハ千葉の軍大將東六郎鎮胤が領地ふり六郎幼少の時よりたの寿林寺ふて手跡學文も習ひ師弟のよ〻を有るる上地頭ふり菩提寺ふりしとうさならざる寺ふり〻うが今とても折々まのりて他事ふく申かゝ〻ゑ夕ア云ふど見えゝり

四季咲の櫻　庭中ふあり周り五尺許石の玉垣をめぐらを花一重ふりむゝ〻小見川ふ有〻櫻の種ふり〻或人いゝり

千大ゞ谷　本堂の後の山ふ至りて西地を望めバいと廣々さる耕地あり其の邊ミふ一圓ふ千丈ばかやつといふ又千葉氏族の住〻ゐたりふをば千葉ゞ谷ともも云といゝり東六郎が城跡ハ

平山と云所ふて笹川臺ふ大門の跡あり
名物笹川蜆とて此邊石出今泉のあうら迫多く出づ

椿の海　今干潟八万石といふい是ふり香取志云神宮を相距夏六里許香取迺瑳海上三郡の交ふ接き周迺十里餘此湖水今ハ消歇して田園とふもり古老傳て言大古此所ふ最大ふゝ椿樹あり高さ數百丈枝葉三里の間ふ扶疏し華咲時ハ天紅ふして散時ハ地ふ錦を敷うと疑ハる吾大神ハ鏡ふ影向しゆふ此木壽盡て根と共ふ自ら倒る根の跡湖水とふる曰て是を椿の海といふ上枝の方を上總といひ下枝の方を下總といふ畧此湖水の儞ふ椿村と云るあり椿海ふ曰て然號せり又湖水ふり迺瑳郡矢揷浦ふ到る夏三里許然るふ寛文中人有て官ふ達し大命を奉て地を堀湖水を矢揷の浦ふ流し水陸田數千町を獲ふ是斯人民移住て十八村とふれり各共ふ椿新田某の村と稱ふ

世俗干潟といふ是ふり田海の変時有て湖水変りて民屋田園とふもり然と今大宮司家毎年二月初子丑の日椿海の祭あり是則古しへ此湖水神宮の池ふりし時の遺則ふり云云

石出　此所ハ利根川へふり出さるところふて常陸原の砂山と相對し風景至てよ佳し千葉の氏族石出日向守亂朝代々居城せし所ふり

鹿嶋日記ふ云流れのまゝにくだれば光俊の朝臣の霜ふうれたるなどよ侍もし萩原ハさとる方よみやその東し隣ふる日川といふ里ふ沙山とて草木ふどもなく砂のみ立のぞもる高山あり右のうさい志もつふさの國ハ香取海上のふさつの郡ハじきたり海上といふい山上の憶良の臣の鎮懐石の歌万葉五の巻にとゝ此をとれきつ深江のうなゝみの子負ハ原とよ見るをたりへば海のそとうふるよし此名ふりうり此ゝさすい河のひろさ坂東道七里ふもはまりぬべし云云

砂山

いしで
石出より
常陸の
砂山を
見る湯
湖城
春一
寫

岩井不動　岩井村ふあり二王門本堂鐘楼堂いとをごそろふり山の上より清水落る瀧口數ろ所有り四十八瀧ありと云堂の後の方ふ大瀧ろり病人死生の願此所ふ垢離して護摩をさく死病ハ物を忘るといふ

下間ふかヒろぬ闕伽の雫ろ形　蓼太

奥の院不動明王ハ春日の作といふ同岩屋二丁ぢろり通りぬけ瀧あり左右ふ三十三所の観音有り大師遊歴の地と云

猿田大権現　猿田村ふあり諸國圭齋録下總國神社部ふ三十石

猿田権現　海上郡猿田郷　石毛伊織とゝも又新義真言部ふ十石

海上郡舟木郷　東光寺ふど見えたり

高田川對陳　常總軍記ふ云畧斯て常州國見の長臣栗林下總守義長ハ印西松虎臺より此處へ陳をうつし利根川を背ふあて高田川の岸ふ陳し惣勢合て五千餘騎旗さし物を風ふ靡し

隊伍整々と備へりまゝ千葉方ふハ東六郎鎮胤を大將として三千餘騎次將ふハ二条大藏五百餘騎烏居筑後五百餘騎村田兵衛五百餘騎千葉ゞ旗下のあつはり勢その勢都合六千餘騎高田川の端ふ押ろせ川を隔て矢軍ふ數日をあくりていまゞ墓々しき軍もふろりゝ尹爰ふ義長熟々と思ひろるハ千葉ハ主戦ふして日ふあまる大軍先手ちでふ六千餘ふり後陳ちしはちまバ二万をハ仕べし我ハ客戦ふして味方ハ小勢ふり自余の如く軍せゞ千ふ一つも勝支あゝハしまづ千葉方の大將共ハ不和とふるべき反簡を行て同士軍させ其弊ふ乗て兵を出して勝支をふゝべしと思ひちゝらく其術を工夫しろるゞきハと考へ出して腹心の家人を潛うふ壽林寺へ使ハし主人の病氣平愈の祈禱をたのゝ其御禮として貞宗の太刀一腰ふ神馬一疋飼料として黄金十五枚を奉納せらゝる爰ふ千葉

の惣大将ゝ命ぜらゝ東六郎ハ武運長久の祈をたのまんと
壽林寺ゝいさゝ法印ゝ對面し戦場の習ゝをバ再會ハ期しが
たしとて酒宴をあるゝゝ額殿ゝはなき置さる馬を見つ
け立寄て是をゝるゝ黒のぬとき逞ましき馬ゝして八寸ゝ餘
ゝる名馬ゝあり六郎常ゝ馬を愛ゝる支ひとゝゝあるゝぬ男ゝれ
バ頻りゝ是をほしゝくゝあり誠ゝむゝ宇治川を越し摺墨もい
うでゝ是ゝ増るべき天晴の駿足ゝこの馬ゝ乗戦場ゝ出る
ゝらバ海山も一飛ゝるゝん願ゝくゝハ此馬某ゝたびゝくゝと頻ゝ
是を所望しゝれバ法印も出家の身故馬の入用ゝあるゝ去ゝゝ
他の人ゝらんゝハ奉納せし人の思ゝくゝもゝあもゝゝ辞退もゝべ
き支ゝれど君ハ大檀那といひ殊ゝ國の守ゝり師弟の約もあ
ゝバ黙止ゝゝゝ所望ゝ任せ進上せんと申ゝれゝり六郎大ゝ
ゝろこび観音の寶前へ米五十俵を奉納して馬を率てゝ帰り

ゝり義長ハ思ゝまゝゝゝ斗策ゝれりと心ゝうゝづきゝそゝゝ
敵の陳中へ忍びをいゝ云しめゝり此度壽林寺の吹挙ゝて
六郎殿ハ義長の味方とゝり近日高田川を打渡し合戦あゝゝ
ゝゝゝ裏切きべしと浅瀬をもゝ案内しゝそゝゝ契約せられ
れバ義長ゝ秘蔵せし黒の名馬を六郎殿ゝ参らせゝり是ハ
乱軍の節六郎殿の目印ゝとゝことしやゝゝ雑説をゝ申々
る此殿づけといゝむゝ足利の代ゝハ吉良今川を殿つけ
吉良紀る時ハ今川よりつゝべしと御證文を下され惣下座ゝ
尊敬せしゝとゝゝ又大閤秀吉公の御時ハ大和大納言秀長徳川
大納言家康公を殿付とせり御當代ゝいたりても御三家西御
殿の類殿つけ惣下座ゝりされバ其頃千葉の家ゝて八此六郎
を殿つけゝよ二条大藏鳥居村田是を聞き大ゝあやしゝを疑ひ
そゝてされバ六郎殿逆心ありとて評定ゝし二条下知して六郎
を招き饗應の帰り路岩山といふ難所ゝ伏兵を置鉄炮ゝ以て
討取べしとそゝりしゝども六郎是をさとり道を替て戻りし

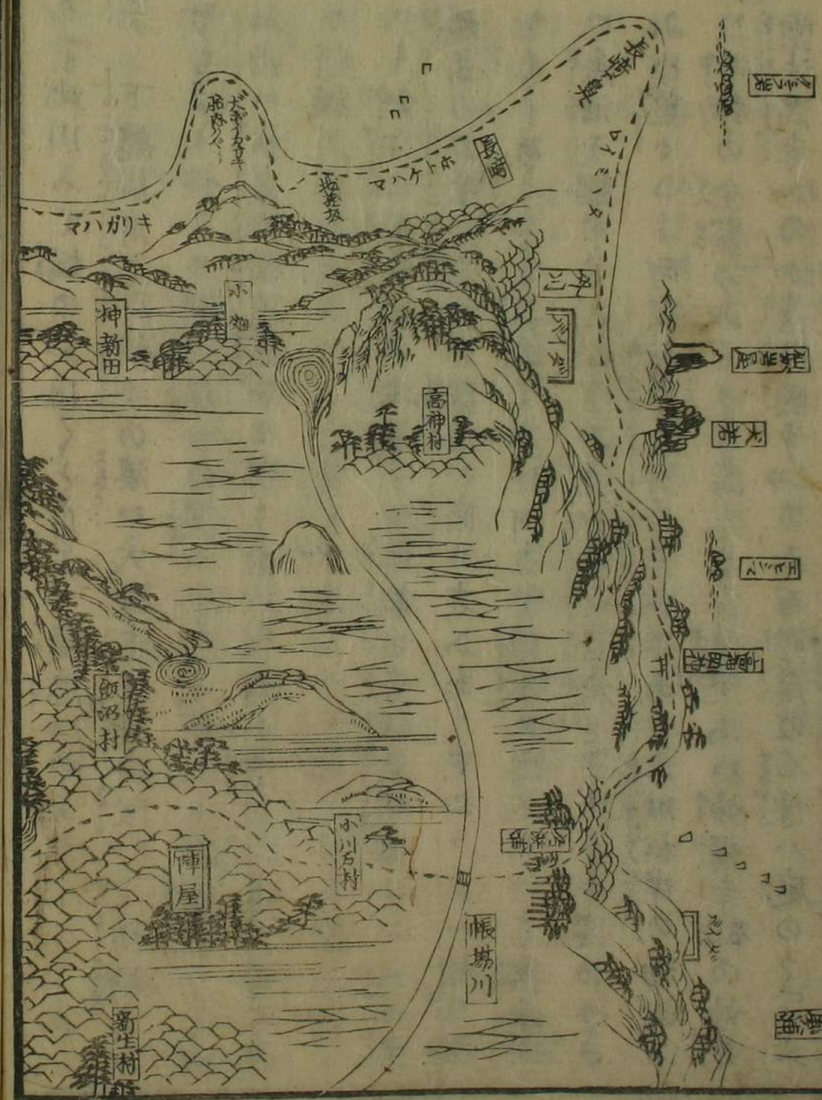
ろバむふーく是も止さうろう斯て東六郎ハ大ふいかり二条
ゞ伏兵ふ既ふ命もあやうう〜ゞ此支そやくも悟うろバ其
場をのがれまぐゝふ陳所へ押うけて大蔵を討ん支安〜といひ
ども内乱をおそれ扣さるふ今大蔵二条へ帰りさる上ハ何の
おそる〜處ゝあらんと逞兵百五十餘騎をゝさうひ二条ゞ館
へ押寄我こそハ東六郎鎮胤ゝり岸山の謝禮ふ推参せり首を
渡さべーと云もあへぎ真一文字ふ切う〜る大蔵も六郎と聞
しうバ今ハのゞもぬ處と思へそせ出て戦ひ〜ゞ河うい六郎
ふ及ぶべき絶ふ切たをさをりるを六郎ろ郎等堤大助そせ寄
て首を取〜ろバたちまち舘ふ火をかけ一遍の煙とそゝりふ
ろり東六郎鎮胤より七代の祖東下野守常緑ハ千葉常胤卿の
宗族御先祖の御分郡とー東郷をたゝいりるふより
千葉下野守と改て初て東の下野守と号〜なる吉め下野守
ハ歌人ゝり今地下ふ歌道の傳いる支此人より始る東ノ野州と
いふハ是ゝ此高弟を種玉菴宗祇といふ宗祇の傳を三条殿へ
ほ〜へ逍遥院稱名院三光院其御子を圓智院公國といふそめ

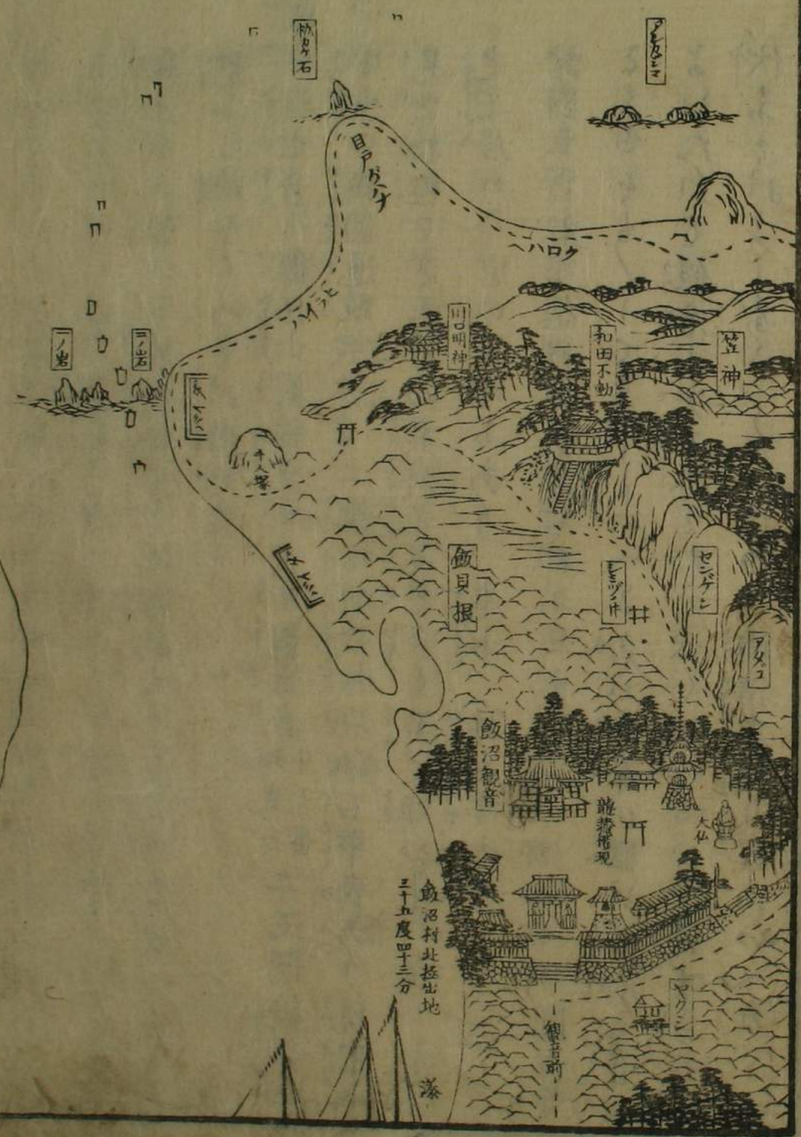
御子を三條大納言實條といふ公國の高弟を細川玄旨法印と
いふ古今の傳受を丹後たゝべの城ふてうへ〜奉り〜支その
頃の書ふくハ〜此下野守ハ此支吉と〜く〜く佐倉へ聞へ〜ゝ
東六郎より七世の祖ゝり
べ千葉勝胤家臣ふ命ゞて次弟を正〜一老臣原式部ゞ父胤總
入道了月大須賀ふ隠居〜て在ゝるを招ぎるせ評定ふ及ゝれ
バ了月ゞ曰二条大蔵ハ敵の斗策ふおちいり我罪おのれとせ
むるれ処也六郎殿ふハ一点の不忠ふ〜猶又此度高田川の夜
軍ふ鳥居村田荒海の三将打死せ〜由聞及べり又義長今度兵
を出を支全く千葉を亡ぼをべきふ〜もあ〜ゞ唯武威をゝあ
ゝの一通りゝらん此度ハ御和睦有て然るべ〜と則神大寺和
尚を頼を小見川越前守ハむう〜天菴の旗下ふて相知れる中
ゝをゞ小見川を差添義長の陳へ遣〜ゝをゞ義長も尤と約〜
をふいち勝胤の姫君十三支ゝるを岡見傳喜ゞ三男谷田部の
岡見主殿どの〜妻と約〜傳喜どの〜末の御娘を御舎弟大須

賀四郎胤信の妻と約せしめ両家をもとふく人質を取かと
ふくかふく御和睦とぐのへまれば双方陳をぞ引取り（本文取意）
海上八幡宮　芝崎村ゐあり諸國圭齋録下總國神社部ふ三十石
八幡海上郡芝崎郷松本長門とゝも例祭六月十五日出輿あり
右三座ふりそゐ海上八幡と松岸の宇賀大権現と本所の妙見
宮ふり右三座の御輿一箇年ゐ垣根村御假殿まで一箇年ハ銚
子長崎の濱堅石の上まで是隔年ふり
世人此邊よりをべて銚子と稱ふ
松岸　銚子往来の旅人此河岸より揚る遥肆有てゐと繁昌ふる
地ふり是より長塚本城松本今宮荒野新生ふとを經て飯沼の
観世音ゐいくる（此間一里）總常日記ふ松岸といふふ船そてくりふ
とより飯沼かけて岸ふのぞめる家居ども見ヒさをふ時しら
ぬ雪のふりをくる赤ちをるゐ皆蠣の貝もてふくるふり

くり此川ふて蠣のおほくとらるゝ事思ひやるべし
銚子　下總國海上郡銚子の渓ハ大日本東方の限一名犬坊崎と云
をもくく銚子ゐ関東第一の渓ふして人家五千ふ餘もりといい
ふ西ゐ松岸垣根芝崎をろ〳〵南ゐ三崎小濱をかぎりとし北
ゐ利根川の末渓ふいくり東ゐ大海ふり其間方二三里ふおよ
べり飯沼山圓福寺ゐ本尊十一面観世音坂東順禮廿七番の霊
場ふり松平右京亮の陳屋ゐ南の方ふあり東のうくゐ飯貝根
をえしめとして長崎より外河ものゝ猟船の出入ーげく濱邊ふ
ゐ魚油干鰯のこぎおきふ老少男女昼夜をころくくぞ渓のうく
ふゐ整々さる町家新生荒野今宮松本あり本城松岸の両町ふ
ゐ遊樓の全盛いふぞうりふ〳〵佛院ふゐ妙福寺（法華）の妙見
堂法満寺（向土）の伽藍浄國寺（浄土）の五百羅漢の石像ハ庭のうくゐふ
あり松岸の良福寺庭中の糸櫻高神の石山寺（天台）威徳寺（真言）の藥

銚子濱磯巡の圖


マハガリキ
マハケトホ
神新田
小畑
高神村
飯沼村
小川台村
陣屋
帳場川
蜀生村


目戸ガケ
ハロク
ハイシ
笠神
和田不動
川口明神
飯貝根
ヒツヂ井
センゲン
アタコ
飯沼観音
大仏
飯沼村北極出地
三十五度四十三分
観音前
ヤクシ
海
洲
初寄
常陸原
三十一

師如来ハ天竺より渡らせるふ尊像といえどもふ東の方へふ
り出さる山の上ふハ和田の不動堂石階の左右ふ龍あり古の山
ふ登れハ後の方ハ蒼松の黛色濃ふして前ハ東海ふのぞき奇
岩左右ふ聳へて風色斜ふ〳〵しび濱めぐりの人々もまづこゝふ
憩ふて時をうつさぬ勝地なり

飯沼観世音　飯沼山圓福寺十一面観世音坂東二十七番二王門鐘楼石垣
本堂の額圓通殿得水書二重塔龍藏権現銅石華表あり境内ふ
見世物輕とざゝなる其外茶見世多く至て賑ハ
定芝居ハ今宮の芝町ふあり　座本　梅本妻太夫

諸國圭齋録下總國新義真言部ふ三十石海上郡飯沼郷圓福寺
とゝもそ〳〵てうゝといへる名ハ志摩の國ハ答志と音か
よひたれど假名も天不志とかくべく詞の心ハ出伏まさハ遠
伏ふとれよ〳〵ふるべくおぼゆと與清鹿嶋日記ふいへり

寛齋遺藁四　遊銚子感事而作二首

風波千里幾辛艱孤負春光忽自還何計平生如意筆却教今日
恨空閑

東海之東渺々波飛帆礙眼亦無多春雲底事癡頑甚不使我爲
觀日歌

名物　此の外五山堂詩話ふ種々の書ふ詩歌等多く見ゆれと畧そ

防風　千リメン　白魚　鰹の塩辛　鱸　牡蠣
松露　弁の醤油　廣屋ふ〳〵ハ　吉野屋料理
海藻蒟蒻人飯沼ふん味噌汁ふ煮て産婦あとそらの藥と云
観音より西の通ハ観音前荒生中町田町荒野橋本町竹町通町
袋町明神町萬町芝町富田屋町通石町今宮目出度町今宮芝町
唐子町夫より大込松本本城長塚松岸ふ達そ
まさ観音より東の方を飯貝根といふそん芝町八町濱町濱宿
田中町五藩町和田

町。清水町。橋本町。通町。田場町。祖松町。東中町。東下町。西中町。西下町。市左衛門町。本町。竹町。是なり

清水の井　飯貝根清水町ふあり方二間ばかり石ふてかこゝる井也。銚子第一の清き水ふり水汲人終日群集ふく

和田不動堂　和田の南山の上ふあり石坂の左右ふ瀧あり風景至てよし

川口明神　川口の方へさし出さる山の上ふあり拝殿ふ白紙大明神の額うゝ也。是より川口を眼下ふ見おろし常陸原より鹿嶋の浦奥州の浦々迄も見渡さる鹿嶋日記ふえもいはぬ磯べのさま岩ゝたゞぞまひよせうへる浪とりあつめさるあハれさ言ぞふもふんでふもはくしがさしめどがいふ帆うけ島三一嶋ふどいづれもめづらしさふ目ひらうれぬれきのうさい東の海雲ゐふつゞけてそれたをみをもらべれ不知海ゝ沖ふ技えもみえふくにいうでう浪の花い咲覧

云傳ふむうし四日市場村ふ長者あり其娘を延命姫と云上富田屋町の形部と云もの媒ふて阿部清明を聟とし姫顔かさち至て見ふくし清明是をゝらへ長者の家を逃いで小濱村の海の端ふ草履をぬき捨身を投さる躰ふふし置同村西安寺ふ入て忍び隠る姫後を追ひけ此所ふ来うの草履を見て大ふなげき我もともふと思ひ定め海へ飛入り底のみくずと成ふさ斯て姫の尸川口ふ流れ来りしを所の者共引あけて墓と擬を納め祭りし故ふ墓擬大明神といえりゝるをいはの頃ふろ白紙の字ふあやまれりと云此神もとより顔形のそふくきを云ふる故ふや世人髪の毛の色あゝきまゝさいちゞ也もあどの人擬を奉うて祈誓もれバ験あり或ハ顔のできもれあざふと有人ハ紅粉おしろいを奉うて祈るふ神妙不思義の霊験あうとぞ。又銚子濱長く不猟の支あをバ川口明神をいさ免のさめ小濱村西安寺ふ祭りある清明の神より幣を乞来りて川口明神へ奉をバ奇妙ふ大猟と成といえり

千人塚　川口ふ有りむうし猟師の海中ふ溺死しあるを葬うし塚也と云石像の地蔵尊建り毎年七月銚子中の寺々其日くの定めありて此塚の上ふて施餓鬼あり何人の詠しふや

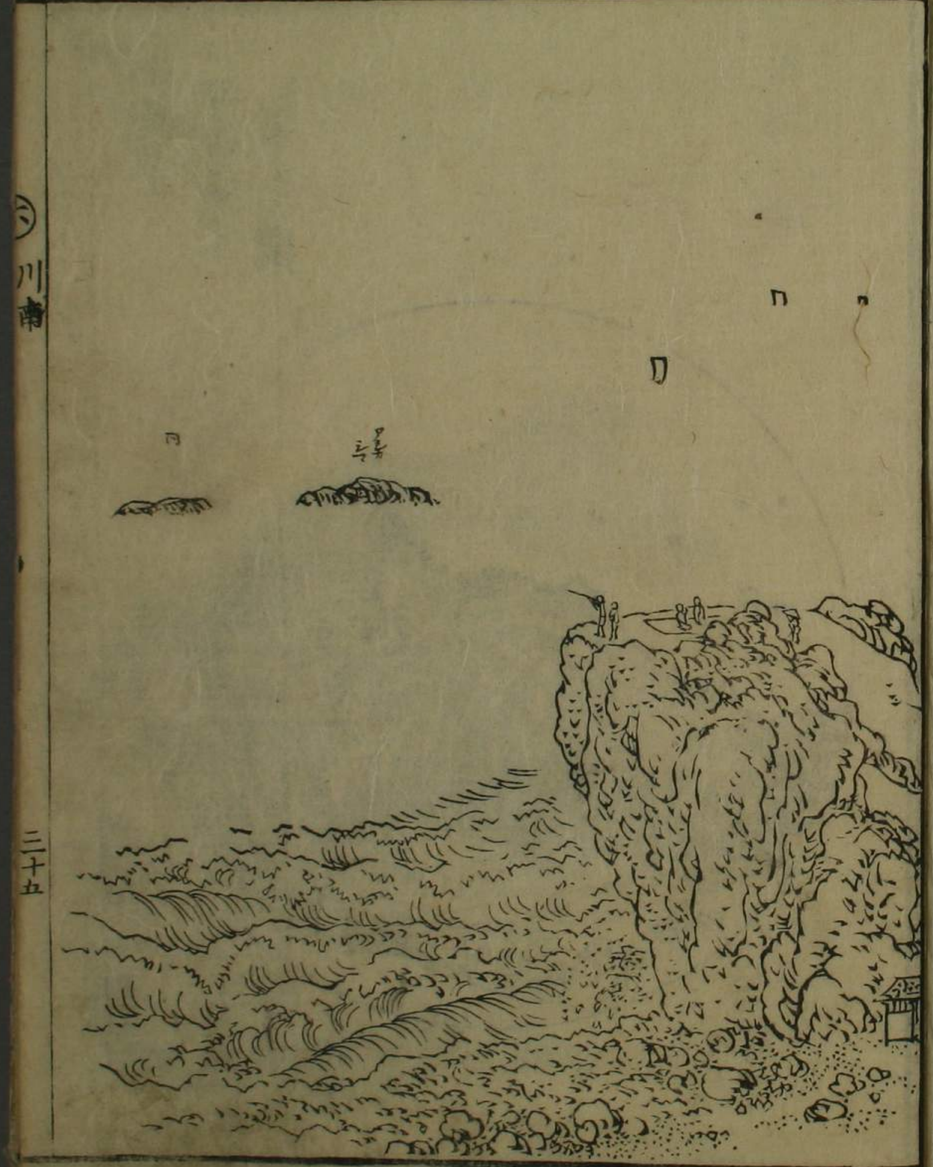
うさふさ此ゝえしあハきをいむうしふて今ふ泪ざのたゞもれ

ゆる塚まゝ猟舩の風あしくして帰うおそき時ハ此塚のうへ

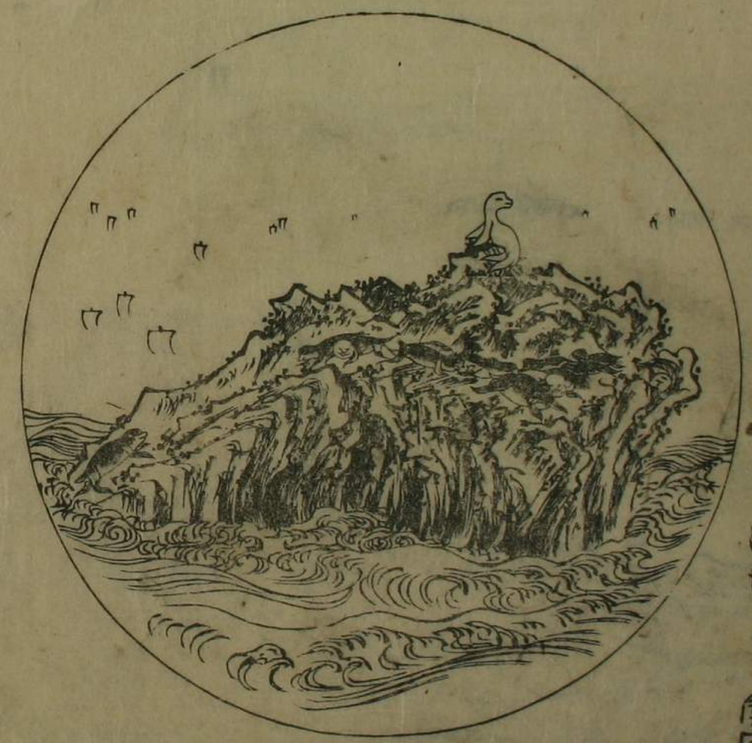
ふて火を焚川口の目印とする由ふて頂ふ火を焚〜跡あり此
塚の側ふ鉄炮の臺場あり世人川口の御臺場と云
川口　則ち銚子口ふり岸ふ添て一の岩二の岩といふて大ふ
る岩二筒所あり其間凡五六十間許此岩より常陸の羽崎迄ハ
程遠けれど海浅くして船通せず依て此岩の間を出入す至て
難所ありといふ大荒浪の岩ふあたりて折くだけるさまいと
おそろし
是より南の方へ儀つゞきふ行を濱めぐりと云名所多〜
目戸ヶ鼻　東海第一の出さきふり川口より此所までを平磯と
いふ色々の名貝小石多〜帆うけ石ハ海中ふたてり七月廿六
日の夜銚子中の老若男女此所ふ出て月待す群集大方ふ〜ゞ
葦鹿嶋　めどヶ鼻より此所までを黒ハへ濱といふ黒石多〜あ
〜う嶋ハ岸より四五町許ふあれて小嶋ふ〜ろあり年中あ〜

う此嶋ふあがる支二三十或ハ八九十多き時ハ二三百疋ふも
及ぶ波打ぎわふひとつの岳あり是ふ登りて望るふ数百の
あ〜うかさふり合上ふふり下ふふりくるひ遊ふさゑ犬の子
の乳を爭ヶ如〜其鳴声白鳥のふくゞ如く遠く迫聞へてさハ
ゞ〜中ふ大海瀬一疋高き所ふ登り四方を見廻〜番をふて若
船近ふる時ハ鳴て群を驚ふ〜悉く水中ふ飛入るの是をあ〜ふ
出の番いつふても居らぬ支ふ〜鳥銃を以て打捉る大さ八九
尺を大とす海中を行時ハ半身を水上ふ浮ふ〜立て潮を飛
〜行く甚畏るべき状ふり按ふ紀州日高郡衣奈庄大引浦より
地方を離ること四町許ふ〜て周圍百四十間餘の小嶋ふ〜毎
年秋の土用前後ふハ海瀬此嶋ふ来りて春の土用前後ふハ何
も〜ふ帰る云云小ふるものハ長さ五六尺大ふるものハ一丈二
三尺ふ至と桃洞遺筆ふ見えたれど銚子のあ〜ふハ年中居り

銚子浦濱廻
海瀕嶋眺望の圖
西内久り
石切の鼻
キリガハナ
素真


川南

海獺島を望遠鏡ふてえゝる圖



湖城春一寫

海獺の圖

大きさ八九尺ニ過ぎざるど形狀ハ同トさまあり頭小く口尖り歯牙大の歯牙ニ似たり目ハ大ニして耳至て小さく吻鬚粗く長し全身短毛あり常の品ハ其毛茶褐色あるまゝ白色黒白雜色蒼黒色もあり左右の扁髻爪ありて末ニ岐あり尾ハ獸尾の如くニして至て小さく尾を按て又両髻あり是ニも爪五ツありて末ハ分きて指の如し奥州津軽ニて此髻をテッピといふ又臓腑獸のヒレも鉄砲と名け皮ハ褥とす一或ハ馬食用ニ成る支採藥使記ニ見ル皮ハ用ひ或ハ荷包ニ製す肉ハ剛くして味佳ならず本草ニ主治を缺く東醫寶鑑ニ曰味鹹無毒主人食魚中毒魚骨傷人及喉鯁不下者又時珍食物本草ニ曰味鹹甘平無毒食之消膈及瘻瘤邪氣結核骨燒灰服治皷脹腫滿まゝ脂ハ金瘡ニ傅て良云云一説ニ海獺の大なるものを蝦夷ニて トヾといふ又紀州の阿志加ハ海驢なるべしといふ云云チとトヾとハ同物なり海獺と海驢ハ同類ニして別物なり形ち海獺より大ニして體ハ痩せ其毛淡茶色ニして左右の鰭ハ海獺よりハ短くこれをもて異とす此外ニ海豹獺虎臓腑獸その外海獺ニ類る海獸甚ざ多し云云諺ニ鰯の大なるハトヾニなるとも世人ハよく云支なり先年銚子の濱近き所ニて トヾの死したるを拾ひし人あり是ハトヾ天上せんとして途中より落さるもの也と土人云あひり其形尋常の鰯より大なれども別ニ替る支なくたゞ鱗の間より太き毛多く生出し頭より尾の方段々と毛長く尾ニ至ても長さ二三寸ニも至りとぞ此外ニも如此トヾを見るもの折々ありといえり是もトヾといふものゝ

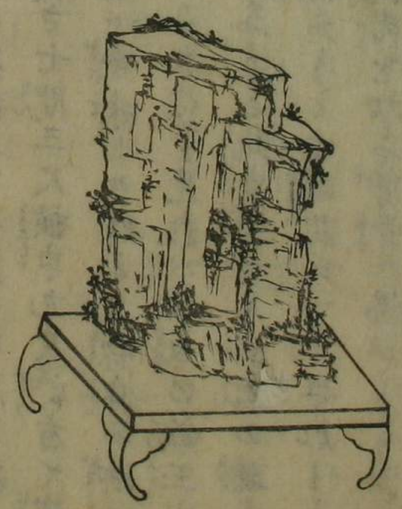
按るニ海獺の大なるをトヾと云といへば古の海獺も天上せるものと見えたり想山著聞奇集ニ文化豊後國佐伯侯の藩士間某ニ七郎右衛門と云て側用人のよし砲術を好で江戸表火術の師家浅

羽其の門人也天保五年甲午九月山猟をせんとて一両輩と共
ふ六匁玉の鉄炮を携へ佐伯の城下より一里半程有る海岸
雲止山と云ふ遊びくるふ海上俄ふ黒雲を生し烈風海水を巻
あげ暴雨車軸を流し山海鳴動して物凄し遊士も側ある堂ふ
入て海上を眺るふ何とハ志らぞ海中より雲ふらたり昇天す
る有さまあて雲間ふ火焔ひらめき真一文字ふ光ふを差て
鳴り来る間氏ハ勇猛の人ある故直ふ鉄炮を構へ矢比を待て
彼煽々くる火焔を目當大空を打さるふ手ごたへもあけもバ
打そんじさる支と心得其内ふ雲も吹拂ひ晴天と成さる也
さて心ふも留ぞ其日ハ帰宅ふしくりくさて夫より三日
めふ同國北浦と云所の猟師何とも知もぬ大ある海獣の汐ふ
つきて海濱ふ漂差せし由代官所へ訴へくる故城下よりも目
付役を初め役人あまさ相越段々様子を窺ひ見るふ老海獺と

見えて惣身短き毛ふして色ハ茶色ふて背通りハ黒く濃く腹
ハ薄茶色ふて鰭大きく惣長さ七間三尺横巾九尺許有て實ふ
えづらしき海獺ふり役人逐一吟味しられども惣身ふ聊ろの
疵もふくたく左の目ふ穴ありさぐり見れば六匁の鉄玉出さ
りたる正しく間氏の打たるふりと此支具さふ主君の聽ふ達
しくるもバ打さるものゝ手柄ふりとて則間氏へ下されしと也
依て城下へ引取まづ皮を剥肉を切ふ背骨ハ思ひしより細く
外ふ小骨もふく惣身肉のみ多く白色ふして油多く味鯨より
美し此肉勞症の薬ふて一度食へバ子孫ふ至る迄其病ふしと
て一家中ハ申ふ及バず遠方のものまで間氏へ食ふ来り或ハ
貰ひて行も多く悉く施し盡したりと也さて其皮を泥障とふ
して弟一を君侯へ献じ弟二を國老ふ贈り弟三を江戸ふ持来
りて師匠の浅羽氏へ贈る其餘をべて泥障十八懸とふりしを

同僚の人々ゐ分ち與へしと也をべて海濱ゐてい魚龍の昇天
をる支折々有もの多りと云右師家の淺羽氏い主馬政德と云
居の人多り諸國ゐ門人も　て御先手与力ゐて江戸牛込ゐ住
多くありて名高き人多り

カン石　海瀨嶋の邊海底より出る黑石ゐて里人カン石と唱ゐ
石質石炭の類ゐして至て上品ゐり黑色光澤漆のごとし予一ツ
を藏を高さ七寸
方五寸ぞりり
ゆゑい猟師の綱
ゐかゝりて海底
より出るものゐ
り故ゐ大なるい
ゐしと云大抵二三寸を
大とゝ如此大ゐるい多し
と也里人大ゐ珍とも



大吹ゞ崎　海上砥荒砥是より出る故ゐ一名石切の鼻とも云此所ゐ
胎内くゞりといゐ岩窟ありて浪うち涯へ通りぬけ岩山へそい
登る甚ゞ難所ありあしろ嶋より此所までを霧ゞ濱といゐ大
浪の打寄る磯輪ゐまゝば浪ゐぶき飛散て常ゐ霧の晴ざるゞ如
し砥石山より地藏坂を下りて佛濱を通り長崎ゐいさる

長崎ゞ鼻　東西の限り西の長崎ゐ對しての名ゐりと云此所も
猟場ゐして漁家あまゝ建ゐらびたくろそぬ岩木を庭の海とし
大ゐる岩のおもしろき形してあさりの小嶋い岸うつ浪ゐそ
ゞさをかくし風景言葉ゐたくし難し是より疊礒と云ゐ出づ
點き岩壁を志ゐるゞ如く沖の方ゐい鯨岩といゐゞあり海
上ゐ鯨の浮び出さるゞごとしてゝを過て外川ゐ至る

外川の濱　此所むろしい家數千軒有し猟場ゐるを今より七八
十年以前津浪ゐて家を流され亡失しさり志ゐ今いまゝ家數

銚子浦大若嶋千騎岩之圖

銚子名洗濱の圖
屏風浦
素鼻

四十一

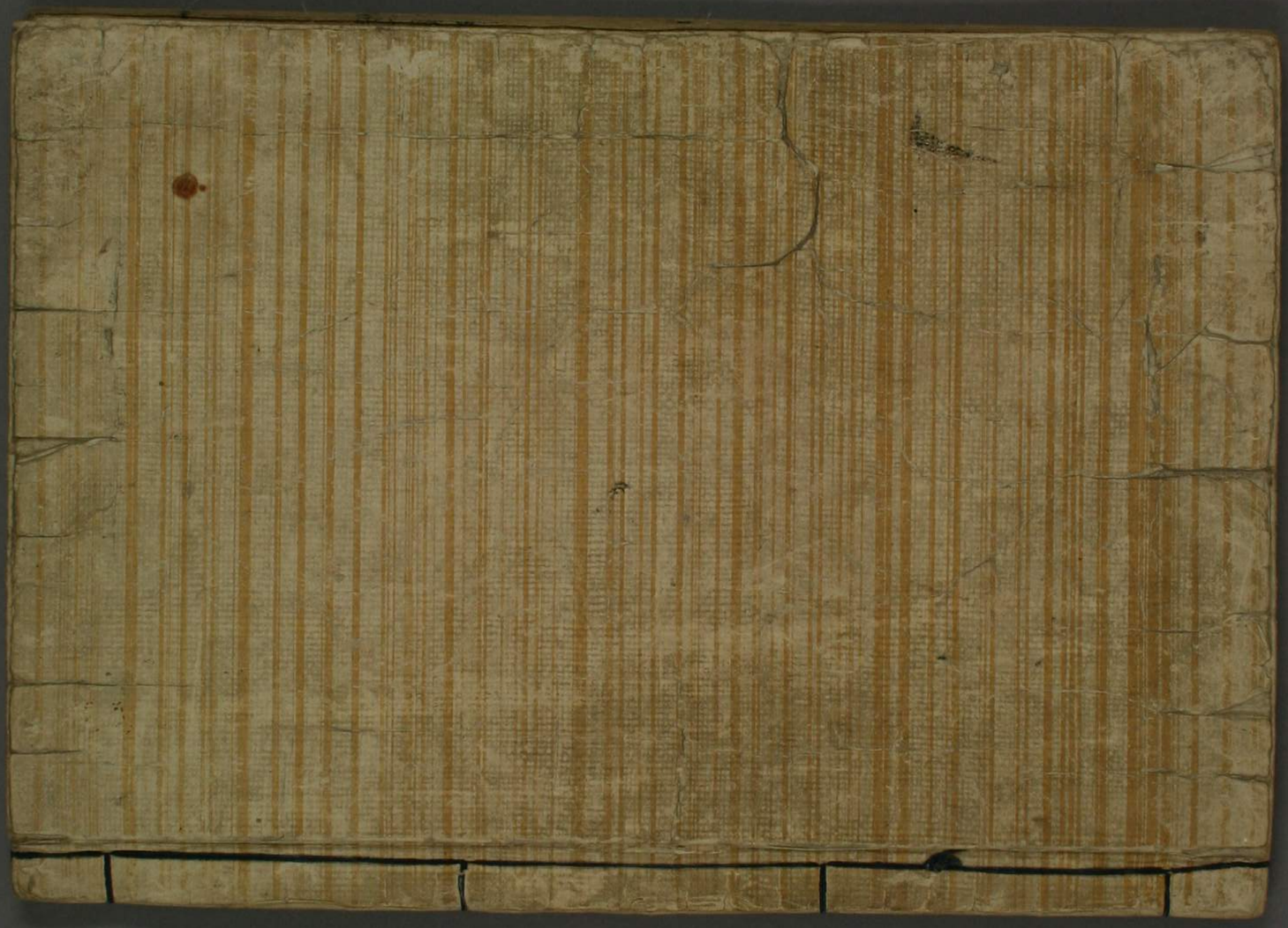
多く出來て大猟場とゐきり南の方ゐ海へ向ひて鉄炮の臺場
ゐり是を外川の御臺場と云
里人の云さくより五六里許西の方ゐ東の庄といふ村あり三
十三ゞ村の鎮守ゐして應神權現を祭り祭禮ハ廿一年めの
四月八日外川の墨岩の上ゐ神輿御濱下りゐり見物の老若群
集夥し云傳むかし外川の宮三丈と云もの〻老母ヒの濱邊ゐ
てうつろ船ゐて流されゝる赤子を拾ひ老母の乳もとゐてと
り揚來り養育せしとゐりいふゐる故ゐてう此子を後ゐ應神
權現と祭りしとぞ其例ゐまりて祭り毎ゐ帰輿の節今ゐたの
宮三丈の家ゐ立寄御小休あり其時此家の老母神酒ゐどを奉
りて饗應し乱ぞらくして老母ふるき箱より乱もゝを取出し
御輿の上ゐかぶせてゆり動ゝしゐぶらサアおうぎんどのをた
ちやきくといふ夫より御輿を上て帰輿ゐ及ぶとゐん

仙ゞ岩屋　外川より南の方岸より一丁許離れて海中ゐたてり
周圍二百間許り高さ四五丈も有べし汐干さる時ハ歩ゐて渡
らるれど常ゐ天狗住よし云ゝる故渡る者稀ゐり予ハ其夏
を知らびして渡り岩屋ゐ入ゝ嶋の半覆ゐ岩屋ゐり是より
入てまゝ一丈餘も下る中ハ廣くして横竪二三丈もたるべし
沖の方へぬけ穴ゐり此所ハ大浪打かゝりて物凄ましく出る
夏ゐり難し又中程より左の方へぬけ穴ゐり是をぬけ穴高き所
へ出る岩角ゐ取にき辛ゞて頂ゐ登るゐ海中の嶋山四方より
大浪の打ゝるゐ山も崩るゝゐうと思ハれ身ハ戰慄して目開
うきぬ程ゐり此山黒石ゐて岩角あらく足いたくして容易ハ一
歩も進ミえがたき山ゐり
犬若　仙ゞ岩の南ゐあり岸より續きゝる一ツの嶋ゐり魚とる者
の長ゐりとて頂ゐたゞ一下棟清くめづらうゐるさまゐ作ゐし

住寂さる別世界誠ふ塵の世外とおもはる是より磯ぢかの山を越して名洗ふいさる

名洗浦　南面海ふ向ひさる猟場あり左の方ハ高神明神の山續き外川の方あり右の山上ふ鉄炮の臺場あり此山ゟ西南の方へ二里許海中ふ差いで浪打ぎわハ巖壁の如くさの所を屏風が浦といふ富士の高峯遠ふ見へ渡り向の出先ハ長井と云所あるより夫より飯岡浦九十九里濱より上總安房の浦々へ續く銚子磯をぐりといえるハ此所ふて終る

利根川圖志巻之六終

山勝

美綱綱志
綱